クレメント・グリーンバーグの美的判断論における主観性と客観性の問題

―― そのカント的／非カント的側面の総合的理解を目指して

大澤 慶久 （東京藝術大学）

20 世紀のアメリカの美術批評家クレメント・グリーンバーグは、カントを理論的基盤とするフォーマリズムの批評家として広く知られている。1960 年の高名な「モダニスト・ペインティング」ではカントの批判哲学を援用し、1970 年代の一連の著述「セミナー」においては自身の美学理論を展開しつつもカントを理論的支柱としていることが窺える。だが 1973 年の「セミナー３」にあたる「趣味は客観的か」においてグリーンバーグはカントを趣味論の最も偉大な哲学者と称える一方、『判断力批判』でカントが趣味の客観性の存在を信じながらもこの問題を解決しなかったと述べ、趣味のコンセンサスがその客観性を裏付ける証左であると主張したのである。

このグリーンバーグの勇み足がカントを後ろ盾とする彼への批判を大いに招くものとなったことは言を俟たない。ティエリー・ド・デューヴをはじめとして、ジェイソン・ガイガー、ディアルムド・コステロ、近年ではガブリエーレ・トマージが、カント美学の経験論的な読み替えとして批判してきた。しかし他方で、彼がカントに基づき美的判断の客観的な例証不可能性を一貫して主張してきたこともそれなりに知られた事実だろう。この矛盾した主張はいかに理解すればよいのか。本発表は、従来の批判を踏まえグリーンバーグの美的判断論における主観性と客観性の問題を新たな視点から捉え直す。

グリーンバーグは、「趣味は客観的か」の翌年に発表した「セミナー２」において美的判断の性質について論じている。この著述の中で彼は、美的判断が判断者の内的な根拠に基づく主観的なものであると主張している。ただし単なる個人的な好みとは異なり、美的判断において判断者はその客観性、普遍性の感覚が得られるとグリーンバーグは述べている。また彼は美的判断では他者の判断を参照することがあるが、その根拠はあくまで判断者自身の作品経験に基づくものであることを強調する。

他方、「趣味は客観的か」においてグリーンバーグは、時の試練に耐えてきたある作品評価のコンセンサスが趣味の客観性を示すものであると論じている。つまり長期的な時間軸の中で形成されるコンセンサスの存在が、趣味の客観性を裏付ける証左なのである。このように「セミナー２」と「趣味は客観的か」における客観性は、美的判断に対する二つの異なる観点から論じられているものなのである。

本発表では、「セミナー２」と「趣味は客観的か」の相互補完的な関係を、カント的／非カント的という観点から考察する。グリーンバーグは、前者ではカントに基づき美的判断の主観的普遍妥当性を論じつつ、後者ではカントを越え出て、美的判断において模範とされるべき客観的な趣味判断の存在を示唆している。つまり美的判断のプロセスにおいて、時の試練に耐え客観性が与えられた趣味判断が、主観的な感覚に基づく美的判断の参照点となることで一つの動的な関係性を形成しているのである。